

動物の心的内容の不確定性と行動の説明

堀越謙治

東京大学 大学院修士課程 総合文化研究科 広域科学専攻

我々が人であれ動物であれ他者の行為を理解するときには、その行為者（主体）の心の中身について語ることが不可欠であろう。というのも、ある程度複雑で多彩な行動を示す主体においては、環境からの刺激（入力）と身体の運動（出力）との間にはそれらをつなぐ一連の内的過程としての心は何らかの因果的役割を担っていると考えられるからである。主体が環境の様々な変化に応じて適切に行動するためには、世界の様々なあり方を適切に把握することが必要である。水を飲むためにはそれがどこにあるのかを把握している必要があるし、天敵から逃げるためにはきちんとその対象を把握していなければならない。このとき、その主体の内部では水や天敵のあり方が何らかの形で表象されていると考えられる。

心的表象は、世界の何かについて表象するものであるから、その表象内容が何であるのかを知ることが重要である。「あの犬は何を見ているのか知らないが何かを見ている」、「あの人は考えている、何を考えているかは知らないが」などと言うことはほとんど役に立つ説明ではないだろう。また、表象内容の違いは行動の違いに関わると考えられるので、その内容を正確に特定することも重要である。ある主体が持つ太郎（犬）の表象と次郎（犬）の表象を、それぞれ「空気」の表象と「葉っぱ」の表象であると考えたとしたらそれは見当ちがいであるし、あるいは単に両方とも「犬」の表象と考えるだけでは、その主体が太郎と次郎という二つの個体を区別していることが説明されないだろう。

では果たして、我々は主体の心的内容を正確に知ることができるのだろうか。主体が人間の場合には問題はそれほど難しいとは思われないかもしれない。なぜならば人は自らの心の中身を言葉にして伝えることができるからである。主体が何を考えているか・感じているか・欲しているかなどは、質問すれば答えてもらうことができる。しかし相手が動物となると、そうもいかない。動物とのコミュニケーションの手段が非常に限られているというだけでなく、我々と彼らにとっての世界のとらえ方が大きく異なるということが、動物の心的内容の記述の正当性に不安を投げかけてくることになる。ここにおいて、今回私が扱うところの「心的内容の不確定性」が問題として現れてくる。

短くまとめると、私を取り上げる問題は以下のようなになる。

- ・主体の行動の満足な説明を行うためには、心的内容を十分な正確さをもって決定しなければならない。
- ・しかし、主体の心的内容を正確に決定することはできないかもしれない。

以上の不安は、私の考えるところでは、主に二つの連続した問題から成り立っている。大まかに述べれば、一つは、動物の心的内容を記述するときに我々が使用する概念が適切ではないために、最適な表現を一つに決められないという問題であり、二つ目は、同

様の内容を表現する複数の文の記述の候補から一つの最適な記述を選び出すことができないのではないかという問題である。これらの問題を考えるうえで重要となるのは、主体にとっての世界のとらえ方を気にかけることである。行動の説明においては、主体が世界をどのように捉えているのか（例えば、シマウマを仲間と捉えるのか、捕食者と捉えるのか）を知ることは重要である。したがって、心的内容の記述においては、そのことを反映した適切な記述を行うことが必要とされる。そして我々人間と動物の間には（あるいは人間同士の間においてさえ）、心的状態が互いに結びつくネットワークの全体的なあり方が大きく異なるということが考えられるので、この違いをいかにして記述に反映させるのが鍵となるだろう。

加えて、主体にとっての世界のとらえ方を念頭に置いたとき、心的内容に関するより根本的な問題、すなわち、表象が何についてであるのかということとその内容をどのように記述すべきなのかという二つの論点の間にどのような関係が成り立つだろうか。表象内容の意味論、あるいは志向性の自然化において問題とされる非決定性において、主体の目線に立つということがどのような意味を持つのかも検討したい。例えばカエルの内的表象はハエを表象しているのか、それとも動く小さな黒い点の表象なのか。この問題に対して、カエルにとって何を表象することに意味があるのかという点から考えることによって、目的論による解答とも少し違う答え方が見えてくるかもしれない。